

## 第4分科会

# 知性・創造性

### 研究課題

## 知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方

### 1 趣旨

子どもたちを取り巻く環境が大きく変化の中で、学校は、子どもたちに「生きる力」を育むことを目指し、基礎的・基本的な知識や技能の習得、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の育成に向けての教育課程を編成していくことが求められている。さらに、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善を進め、社会の変化を柔軟に受け止めていく「社会に開かれた教育課程」にしていくことも求められている。

こうした状況の中で学校においては、地域と連携・協働して、子どもたちが社会の変化に主体的に関わり、課題解決を図るしなやかな知性と豊かな創造性を発揮できるようにしていく必要がある。

そこで、校長は、教育課程を編成し、その成果と課題の把握に努め、その結果をもとに、教育課程の改善を図り、21世紀を生きる子どもたちに必要な資質・能力を育成する創意ある教育の推進に向けて積極的に取り組むことが重要である。そのためには、教育課程のPDCAサイクルの確立や地域などの外部資源の効果的な活用等、社会に開かれた創意ある教育課程にしていくためのカリキュラム・マネジメントが求められる。

本分科会では、校長のリーダーシップの下、しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善についての具体的方策と成果を明らかにする。

### 2 研究発表とグループ協議

#### 研究発表1

##### 【視点①】

しなやかな知性と豊かな創造性の育成

##### 【発表題】

「新たな知」を拓く学習指導を目指して

宮崎県 宮崎市立生目小学校 齋藤 光男

##### 【発表要旨】

これからの社会における諸問題の解決に向け、積極的に行動する子どもの育成を目指して「新たな知」を拓く授業の推進を図るため、校長として果たす役割と指導性を明らかにする。取組として、新学習指導要領の具現化に向けた授業改善、保護者や学校関係者評価及び職員アンケートの活用、学力状況調査の結果分析、校長室便りの活用等を進めてきた。特に、授業力向上に向け、公開授業を中心として授業改善に取り組



み、生目授業モデルによる授業チェックを進めている。

#### (1) 宮崎校長会の基本的な考え方

- ① 言葉の定義
  - ② 学校経営ビジョンの明確な提示
  - ③ 教職員の意識や指導力の向上
- #### (2) 授業改善への意識の高揚への校長の取組
- ① 新学習指導要領解説「総則編」の活用
  - ② アンケートや実態分析の活用
  - ③ 校長室便りの活用

#### (3) 授業力向上に向けての校長の取組

- ① 主題研究の充実
  - ア 生目授業モデルの改善
  - イ 授業視点表の活用
  - ウ いきいきタイムの改善
  - エ ノートの使い方
- ② 一人一公開授業の実施
  - ア 実施の流れ
  - イ 授業後のまとめ
  - ウ 公開授業への校長の助言

#### 【グループ協議の概要】

#### (1) ミドルリーダーを活躍させて、組織を動かす・生かすこと

どの都道府県もミドルリーダーとなる中間層が薄いという問題点を抱えている。その中で、主幹教諭が授業を公開することで、教師の理解・意識の深まりが見られるのはもちろんのこと、初任者層に参観させることで人間関係づくりとともに、初任者を育てることにつながる。ひいては校長による学力向上にもつながるといえる。

#### (2) 地域の教育力を生かすこと

一つは地域の教育資源(学校林、太鼓、ふるさと教育等)の活用である。総合的な学習の中で、学校と地域が、Win-Winの関係にならなければ効果は期待できないであろう。

また、保護者や地域のいろいろな声を聞きながら、学校教育目標の実現のために、学校で取り組むこと、家庭・地域で取り組むことの内容を明記し、それを共有することが学校と地域との協力の推進につながる。

#### (3) 授業改善のためにも小中連携を一層進めること

何といたっても授業改善のためには職員の意識改革が必要である。そのためには校長がイメージをしっかりとって校長便りなどで表すことが効果的である。また、都道府県によっては小・中学校間の異動がないところもあるようだが、授業改善に小学校の「キメ細やかさ」、中学校の「専門性」が必要である。更には少なくともここまでは揃えようという最低ラインを決めることが大切である。

## 研究発表 2

## 〔視点②〕

しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

## 〔発表題〕

しなやかな知性と豊かな創造性を育むカリキュラム・マネジメントと校長の指導性について

北海道 喜茂別町立鈴川小学校 中村 和男

## 〔発表要旨〕

北海道後志地区では、平成28年度より本分科会の研究課題の解決に向け、①カリキュラム・マネジメントの実現、②主体的・対話的で深い学びの実現、の二つの視点から共同研究を進めてきた。今年度は昨年度までの課題を受け、ビジョンの共有に向けた校長のリーダーシップによるグランドデザインの提示と教科横断的な視点によるカリキュラム編成を進め、実践・検証を行うことで、研究課題の解決を図るとともに、学校の活性化に取り組んでいる。

- (1) 後志小中校長会の研究、研究仮説の設定
- (2) 仮説の推進に関する調査の結果から
  - ① 新学習指導要領の理解とビジョンの共有
  - ② 教科横断的な視点によるカリキュラムの編成・実施
  - ③ 課題の明確化と取組の焦点化
  - ④ 新年度のグランドデザイン・ロードマップの作成と実践例
- (3) 研究のまとめ
  - ① 研究の成果と今後の課題

## 〔グループ協議の概要〕

- (1) ビジョンを共有し、教職員が同じ方向を向いた教育活動としていくこと  
シンプルで目指す子どもの姿が明確なビジョン（方針・資質能力ベース）を提示することが大切である。また、キーワードの連続性（例えば“凡事徹底”をあらゆる場面で繰り返すなど）が必要である。ロードマップを作成する際も、誰がやるのかを明示することで見通しがもてるであろう。
- (2) 教職員評価を活用したり、実際に学ぶ子どもの姿で評価し、改善を図ること  
給与面に反映されていない県もあるが、面接のときに、その教師の役割を確認し、声かけ・助言・指導を適切に行うことが大切である。そのことで、教師が常に笑顔になり、学ぶ子どもたちの表情にも大きく影響する。
- (3) 「見える」「わかる」「伝わる」学校づくりの推進の重要性  
保護者・地域のリサーチを確実にし、「学校の強み」に関わって重点化・焦点化する環境整備が必要である。



## 3 まとめ

研究発表1では、①分かりやすく明確なビジョンの提示、②教職員の意識を高める働きかけ、③研究主題に基づいた授業公開や授業評価を通しての授業力向上についての提言がなされた。具体的な方策として①新学習指導要領の「総則」の理解、②学校評価や学力調査結果を活用し、熱い思いを直接語りかけ、働きかけての教職員の意識改革、③全教職員による主題研究の推進・充実と自校の授業モデルを共有し、その実現を目指すなどの授業力向上等については、全国どの学校においても共通するものであり、共感を伴って大いに参考になるものであった。

研究発表2では、研究プロジェクトチームを中心とした共同研究として、仮説を設定し管内的な一層の推進を意図した研究の取組について提言があった。グランドデザインを作成・活用した実践の他、実態や意識調査の結果から必要とされる校長のリーダーシップを明確にし、①ロードマップの用意、②ミドルリーダー中心の組織体制の整備、③校長自身のカリキュラム・マネジメント理解の深化などについての進捗や学校での実践が示された。共同研究として次なる取組を焦点化し、研究のための研究に終わらせることなく、管内全ての学校において落ちなく足並みをそろえて進め、各校の学校力向上を目指す意志が感じられた。

## 〔成果〕

- (1) 多くの学校で教職員の納得と共感、必要感を生み出すためのビジョンの提示の重要性がよく認識され、新学習指導要領の理解とともに経営ビジョンの共有化が図られていること。
- (2) 教育課程上の諸課題の解決に向けて、ミドルリーダーを中心とした組織的・協働的な取組が展開され始めてきていること。
- (3) 教職員の意識が高まり、学校組織の活性化や教育活動の質の向上を追求する姿へとつながってきていること。

## 〔課題〕

- (1) 「誰が、何を、どのように、いつまでに」などの見通しを共有し、カリキュラム・マネジメントを確実に進めるための組織やシステムを作り出し、定着させることが必要であること。
- (2) 校長として構想力、決断力、実行力等を発揮し、よりよいPDCAサイクルが回るようカリキュラム・マネジメントの実現を一つ一つ丁寧に積み重ねていくこと。
- (3) 社会に開かれた教育課程の実現のためには、学校経営全般について地域や保護者との共通理解を確保し、協力が得られるようにすることが必要であり、校長自身が信頼のもとに各関係機関と密接につながり、コーディネーターの役割を果たしていく必要があること。

